同点弾となるヘディングシュートと打つ高崎（奥）と、飛び込んだ小林（手前）（撮影・中野成博）

KOMAZAWA vs HOSEI

駒澤大学２－１法政大学

「逆境を力に変えて」

前節の東海大戦で6発の大勝と、連勝を4にのばし迎えた法大との首位決戦。断続的に雨が降り続く悪コンディションでの戦いを余儀なくされた両軍は、その雨にも負けない激しい試合展開を繰り広げた。

前半で駒大は苦境に立たされる。34分、MF菊地がアフターチャージで一発退場。チームの要を失い、集中力が一瞬途切れたのか、直後のFKから先制点を許した。

しかし、「自分も退場とか何回もやっているので気持ちは分かるし、その人の分までいつも以上にやらないといけないと思った」（高崎）。その思いは後半開始直後、プレーとなってあらわれる。左サイドで得たFK、「泰史のキックを信じて飛び込んだ」と、高崎がニアですらしたボールはゴールに吸い込まれた。数的不利の中で掴んだエースの同点弾で流れは駒大に傾くと思われたが、64分に駒大にとってこの日2度目の悪夢が訪れる。ペナルティアリア付近まで飛び出したGK山内が相手選手をスライディングで倒し、またも一発退場したのだ。

だが、逆にこの微妙な判定は駒大選手たちを奮い立たせた。9人対11人の不利な状況で猛攻をしのぎ、相手にも一人退場者が出た後の81分、高崎がCKからゴール前で引っ張られPKを獲得。これを八角が「緊張した」と言いながらも左隅に決め、ついに逆転する。これで流れを完全に引き寄せると、残り10分間も前線からの粘り強い守備で1点を守り抜いた。

秋田監督が「悪天候の影響は大きかった」と言うように、降りしきる雨で重みを増したピッチは、法大の細かくパスをつなぐサッカーではなく、駒大の縦に速いサッカーに味方した。しかし、最後に勝敗を分けたのは駒大が退場者を2人出しても勝利にこだわり、「最後まであきらめないでやれた」（高崎）からという要素の方が強いだろう。

この首位決戦を制した駒大は、第10節以来、約5ヶ月遠ざかっていた首位に立った。次節はリーグ屈指の守備力を誇る東学大戦。山内、菊地の両選手を出場停止で欠くが、「要がいないこそ頑張れる」（八角）と逆境を力に変え、連勝街道をひた走る。

（上瀧　悠平）

「諦めない気持ち」で首位奪還！

試合後勝利の挨拶をする塚本（左）、八角（中央）、東平（右）